令和　五　年度

四天王寺東高等学校入学試験問題

国　　語

注意　答はすべて解答用紙に書きなさい。
句読点も一字に数えます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

久留米(くるめ)は、僕と安斎(あんざい)、佐久間の担任である。久留米の態度がきっかけで、同級生からも何かと馬鹿にされている草壁のために、安斎は、プロ野球選手（一流打者「打点王氏」）に、学校で行われる野球教室で、草壁のフォームをほめてもらうよう頼み込むが、打点王氏は困惑する。

そして、だ。安斎がいよいよ、本来の目的に向かい、一歩踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒(さ)めた表情も浮かべた。草壁という生徒がいること自体、忘れている気配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと、緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やってごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず、注意をした。

草壁はびくっと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても、不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「オカマの草壁」と囃(はや)した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が【　A　】に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱っても良し」と決めている節はある。

安斎は縋(すが)るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪(ゆが)めた。このスウィングを褒めるのは a**シナン**のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。自分に向けられた槍(やり)の切っ先の形を、じっと確認するかのようではあった。むっとしているかどうかも分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。
「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」
「先生」あの時の安斎はよく臆せず、喋(しゃべ)り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」
「安斎、何を言ってるんだ」
「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」
安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚(はら)を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかった。
打点王氏のほうはといえば、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。
はい、と草壁は顎(あご)を引くと、すっと構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かった。
先入観を、と僕は念じていた。①そのバットで、吹き飛ばしてほしい、と。
もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露(ひろう)し、その場にいる誰もが呆気(あっけ)に取られ、草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。むろん、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠(みは)るほどではなかった。
安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。
腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。
こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらに、風の音がした。
「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊(たず)ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。
「よく練習するのかな」
「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことありません」
「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻(ひね)り、安斎と僕に②一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置をb**シュウセイ**した。
草壁が素振りをする。
ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、c**イセイ**の良い声を出した。まわりの生徒たちからの

注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、肚の中から光が放射される。d報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指先にまで辿り着く、充足感があった。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁を③たしなめる台詞を発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々といなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、【　B　】、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、【　C　】の大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

念押しする口調が可笑しかったから、いく人かが笑った。場がeナゴんだといえば、ナゴんだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と、僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆっくりと、「僕は、④そうは、思いません」と言い切った。

⑤安斎の表情がくしゃっと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。な

ぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

（伊坂幸太郎『逆ソクラテス』より）

問1 ═══線a～eのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問2 【　A　】に入る言葉として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　形式的　　イ　意図的　　ウ　典型的　　エ　抽象的

問3 ――線①「そのバットで、吹き飛ばしてほしい」について、

(1) どのような考え方を吹き飛ばしてほしいのですか。次の文の空欄に入る言葉を、本文中より八字で抜き出して答えなさい。

草壁は［　　］だという考え方。

(2) (1)と対照的な考え方を示した次の文の空欄に入る言葉を、本文中より九字で抜き出して答えなさい。

［　　］するという考え方。

問4 ――線②「一瞥（べつ）をくれ」、③「たしなめる」の言葉の意味として最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

② 「一瞥をくれ」

ア　ちらっと見て　　イ　にらみつけて

ウ　じっと見て　　エ　全く目もくれないで

③ 「たしなめる」

ア　感動させる　　イ　応援する　　ウ　いましめる　　エ　突き放す

問5 【　B　】、【　C　】に入る言葉として最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

B　ア　乗りかかった舟　　イ　万事塞翁（ばんじさいおう）が馬

ウ　魚心あれば水心　　エ　立つ鳥あとを濁（にご）さず

C　ア　疑心暗鬼　　イ　優柔不断　　ウ　八方美人　　エ　豪放磊落（ごうほうらいらく）

問6 ――線④「そう」は何を指していますか。本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問7　――線⑤「安斎の表情がくしゃっと歪み」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　草壁の歪むほどの笑顔を目の当たりにし、よく見るとおもしろく、滑稽だったから。
イ　思いがけない草壁の積極的な発言で、久留米先生に反撃ができ、快感を覚えたから。
ウ　依頼したとおり、プロ野球選手に賞賛された友だちをもち、誇らしく思えたから。
エ　もう今後は、いかなるときも草壁が回りから見下されないだろうと安心したから。

問8　この文章中で、「安斎」が企てていたことを次のようにまとめました。後の問いに答えなさい。

［　1　］の持っている［　2　］を崩すこと。

(1)　［　1　］に入る人物名を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　打点王氏　　イ　草壁　　ウ　久留米　　エ　僕

(2)　［　2　］に入る言葉を、本文中から三字で抜き出して答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「音楽は自然法則を音で表したもの」という考えに基づけば、音楽の理論は、人間の存在とは関係なく自然界に①普遍的に存在していると考えることができます。「自然法則をできるだけ正確に音で表現する」ことが最も重要なため、人間の感性はなるべく排除しなければなりません。

私たちは、人間が手を加えていないような真の自然物に感動することができます。火山の噴火や広大な砂漠から畏怖や崇高さを感じ、雨のあとにかかる大きく美しい虹に雄大な自然美を感じます。音に関しても、雨の音や波の音、また風の音を聴いていると心が落ち着くという人は多いのではないでしょうか？

こういった自然美を皆で共有するために、人間は「音楽」という表現方法を作り上げてきたという歴史があります。一方で、人間の意図を排除し自然の摂理のみから音楽を作るサウンドスケープのような音楽を除けば、自然美を解釈し音楽へと変換するのは「心」をもった人間であり、その音楽には、必ずその人ならではの「感性や知性」が宿っているものです。そしてそういった感性や知性は、時代とともに変化していきます。

例えば、私たちは、石器時代などの貝殻などを使った演奏や、音程や和音があまり存在

しない太鼓を用いたリズム音楽から、様々な［②］錯誤を繰り返して現代のような綿密な理論を作り上げてきました。クラシック音楽など今世の中にある音楽の大半は、たとえ作曲家らが自然法則に基づいて作った曲だとしても、その自然法則を理解する人間の知性がなければ音楽として表現することができません。

脳の音楽、もしくはピタゴラスでいう「器楽の音楽」の観点から考えると、人間にとって音楽がなくてはなら③ないように、音楽も人間の知性がなければ存在しないのです。

④音楽の感性の変化は、一人間が乳幼児から成人まで発達していく段階においても起こります。例えば、脳が未発達の子供は、難解な現代音楽より単調なメロディーからなる童謡などを好みますが、訓練を積んだ音楽家にとって単調な曲は退屈と感じるでしょう。

このように、音楽の価値はその私たち人間の時代や発達過程によって変化しています。同じ自然物であっても、それを解釈する人間の感性や知性が違えば⑤違う音楽ができ上がるということです。ここでは、脳の感性や知性の発達の観点から、どのように音楽が進化・変化していくのかを見ていきたいと思います。

【中略】我々の脳は、生後すぐに何でもできたわけではなく、生まれてから様々な現象に触れて学習を繰り返すことで、言葉など生活やコミュニケーションに重要な様々な機能が習得されていきます。学習される機能は、本人の身の回りの社会環境に合わせて行われるため、何をどうやって学習するかは個々で異なってきます。この違いが脳を独自に発達させ、その時代、その環境に合った脳になっていくのです。

この、学習と個性に関わるメカニズムとして、脳の可塑性（かそ）が大きく貢献しています。脳の可塑性とは、特に発達期の脳において、「外界の刺激などでおこる機能的、構造的な変化」をいいます。また、脳の可塑性は発達期の方が盛んではありますが、大人においてもみられます。言い換えると、脳は自分の身の回りの環境に応じて最適な処理システムを作り上げる、いわゆる「順応」の機能があり、学習を通して、よく使われるニューロンの回路の処理効率を高め、使われない回路の効率を下げるような機能を備えているのです。

このように、私たちの脳は基本的に、生まれ育った時代や社会で生きていくために、周囲の環境に順応していきます。これが性格や言語、音楽の感性の文化的な特徴となります。日本人は、あまり主張しないで集団の調和を重視する個性があるといわれますが、やはり日本で生まれ育っていればそのような環境に身をおいて生活するため、社会に順応するように日本人らしい性格をもつようになります。

音楽においても、同じような曲を何度も聴くと、脳はその曲に順応します。［⑥］

一方で、脳は新しいものに興味をもつ臓器でもあります。新しい情報に触れると、その情報の中身がわからないため「不安」になり学習しようとします。しかし一度理解してしまうと、その情報は既知情報として脳に［⑦］されていますので、注意を向けなくなり

ます。すでに理解しきってしまったので、不安な情報ではなくなったのです。

世の中は常に新しい情報が入ってきますので、脳は世の中のあらゆる現象に順応すべく、新しい情報を集中して学ぼうとします。わかりやすい例でいうと、初めて会った人間は、その人の性格などがわからないため、会話やコミュニケーションなどを意図的に行ってその人を知ろうとしますよね。しかし、家族などのよく知る相手は、接し方もわかるため、近くにいても積極的に注目する機会は減っていきます。

音楽においても同様です。同じような曲を何度も聴くと脳はその曲に順応します。しかし、あまりにも順応しすぎると今度は「飽き」が生じます。脳は常に学習したい臓器であるため、新しい知識を取り入れようと、これまでに聴いたことのないような音楽に興味をもつようになるのです。この「⑧新しい音楽への興味」が音楽の表現方法に変化をもたらします。

子供の頃に好きだったであろう、赤ちゃんの子守歌も、生涯それだけしか好きにならず、そればかり聴いて人生を終える人はまずいないでしょう。成長とともに、新しい音楽をどんどんと取り入れて学習していくものです。

筆者も、西洋音楽理論に基づく音楽があまりにも溢れすぎてしまい、どの曲を聴いても同じ曲に聴こえてしまうことがありました。自分で作曲した曲さえも同じに聴こえてしまうため、なんとかこの固着から脱却できないかと考え、現代音楽を聴くようになりました。最初は「これは本当に音楽なのか？」と疑問に思うほど、難しく聴きづらいものですが、聴けば聴くほど新しいことがわかるため楽しくなってきます。

このように、人間の脳というのは、不確実な周囲の環境に順応すべく学習しながらも、順応しきるのがゴールなのではなく、さらに新しい情報を取り入れたくなる臓器なのです。

（大黒達也『音楽する脳　天才たちの創造性と超絶技巧の科学』より）

問１　――線①「普遍」の対義語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　秩序　　イ　破壊　　ウ　特殊　　エ　創造

問２　②　に当てはまる漢字二字を答え、四字熟語を完成させなさい。

問３　――線③「ない」と同じ文法的用法のものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　明日は祝日なので授業がない。

イ　気温が低いので桜はまだ咲かない。

ウ　妹の部屋はいつもきたない。

エ　姉の料理はおいしくない。

問4　――線④「音楽」について、ここより前で筆者が述べていることとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　すべての音楽は自然法則に基づいて作られているので、人間はその自然の摂理のみを正確に表現しなければならない。

イ　雨の音や波の音を聴いていて心が落ち着く人が多いのは、それらが人間の手が加えられていない真の音楽といえるからである。

ウ　心を持つ人間が自然の美しさを音楽として表現しようとする以上、必ずその人個人の感性や知性を反映した作品になる。

エ　貝殻や太鼓を使った初歩的な演奏と、現代にある複雑なクラシック音楽では、基づいている自然法則が異なるため全く違ったものになる。

問5　――線⑤「違う音楽ができあがる」のはなぜですか。その理由を説明している次の文の空欄に入る言葉を、指定された字数で文中よりそれぞれ抜き出して答えなさい。

人間の脳は、様々な学習を繰り返すことで周囲の［A　四字］に［B　二字］するため、人によって異なった性格や言語、音楽の感性を手に入れるから。

問6　［⑥］に入る一文として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の親がクラシック音楽好きで家でずっとクラシックを流して育ってきたら、子供もクラシック音楽が好きになる可能性が高くなります。

イ　特定のクラシック音楽を繰り返し聞き続けていたら、演奏者がほんの少しミスをしただけですぐに普段と違う音だと気が付くことができます。

ウ　子供のころに何度も歌っていた童謡は、大人になって歌う機会がなくなったとしてもすぐにメロディを思い出すことができるはずです。

エ　どんなに好きな曲だとしても、同じ音楽を何度も何度も聞き続けていたら、かえって嫌になってしまった経験がある人も多いでしょう。

問7　［⑦］に入る言葉として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　インスパイア　　イ　カウント

ウ　フラッシュバック　　エ　インプット

問８　――線⑧「新しい音楽への興味」について、

(1)　「新しい音楽」の具体例として挙げられているものを、文中から四字で抜き出しなさい。

(2)　「興味」がわいてくる理由を、四十字以内で説明しなさい。

三　この文章は、兼好法師が書いた『徒然草』です。これについて、あとの問いに答えなさい。

①五月五日、※賀茂（かも）の競（くら）べ馬を見侍りしに、車の前に※雑人（ぞうにん）②立ち隔てて見えざりしかば、おのおの下りて、埒（らち）のきはに寄りたれど、殊に人多く立ち込みて、分け入りぬべきA

競馬場の柵のそば寄ったけれども、ことに人が多くこみ合っていて、おし分けて入りこめやうもなし。

方法もない。

かかる折に、向ひなる※棟（あうち）の木に、法師の、登りて、木の股にBついゐて、物見るあり。

向こうにある　　枝　　またがっていて

取りつきながら、いたう睡（ねぶ）りて、落ちぬべき時に目を醒（さ）ます事、度々なり。これを見る人、

今にも落ちそうになる時に

あざけりあさみて、「③世のしれ者かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言ふに、④わが心にふと思ひしままに、「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚（おろ）かなる事はなほまさりたるものを」と言ひたれば、前なる人ども、「⑤まことにさにこそ候ひ（　　）。尤も愚かに候ふ」と言ひて、皆、後を見返り

嘲笑したり、あきれたりして、　天下の大ばか者だなぁ。　　安心してどうして眠って

いっそうまさっているものなのになぁ。

かもしれない。

前にいる人々が、　　ほんとうにそうでした。　　もっともおろかでございました。

て、「⑥ここへ入らせ給へ」とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき。
場所をあけて、

⑦かほどの理（ことわり）、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸
道理、だれでも思いつかないはずはないが、　時が時であったので、

に当りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。
胸にこたえたのであろうか。　非情の木や石ではないので、

※賀茂の競べ馬……毎年五月の初旬に、上賀茂神社で行われていた競馬。
※雑人……民衆。
※棟……竹。

問1　――線①「五月」の月の異名として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　はづき　　イ　うづき　　ウ　さつき　　エ　むつき

問2　――線②「立ち隔てて見えざりしかば」の意味として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　立ちふさがって見えなかったので
イ　立ちふさがって見えなかったけれども
ウ　遠すぎて見えなかったので
エ　遠すぎて見えなかったけれども

問3　‖線A「やうもなし」、B「ついゐて」の読み方を現代仮名遣い（すべてひらがな）で答えなさい。

問4　――線③「世のしれ者かな」とは誰を指して言った言葉ですか。本文中から一語で抜き出して答えなさい。

問5　――線④「わが心」とは、誰の心ですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　法師　　イ　兼好法師　　ウ　雑人　　エ　前なる人ども

問6　――線⑤「まことにさにこそ候ひ（　　）」について、

(1)　（　　）にあてはまる言葉として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　けり　　イ　ける　　ウ　けれ　　エ　けよ

(2)　(1)のような文法上の法則を何といいますか。その名称を、解答欄に合うように答えなさい。

問7　――線⑥「ここへ入らせ給へ」ありますが、なぜ呼び入れたのですか。その理由として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　話を交わしているうちに、お互いに気心も知れてきて、いっしょに競馬見物をすると、もっと楽しめるだろうと期待したから。

イ　競馬見物の場所とりなどはお互いさまなので、これからのことを考えると、今回親切にしておくほうが、自分に得策だと考えたから。

ウ　話を交わしているうちに、口うるさそうな印象をもち、これは呼び入れておかないと厄介なことになるにちがいないと確信したから。

エ　他人をおろかだと言っていたが、よく考えてみると、じつは自分たちこそおろかだと気付いて、反省の気持ちが芽生えたから。

問8　――線⑦「かほどの理」について、

(1)　「かほどの理」とは、どういうことを指していますか。本文中より五十字で抜き出し、初めの五字を答えなさい。

(2)　(1)で論じられている考え方は何ですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　道徳観　　イ　無常観　　ウ　倫理観　　エ　価値観

問9　この文章とほぼ同じ時代に成立した作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　万葉集　　イ　奥の細道　　ウ　竹取物語　　エ　平家物語